

マルセル・フォール

『フランス社会における農民』

Marcel Faure, *Les paysans dans la société française*,
Librairie Armand Colin, 1966, 343pp

津守英夫

本書は、アルマン・コランの社会—政治叢書の一冊として、一九六六年に公刊された。

著者は一九五六年に創刊された農民誌『ペザン』(paysan)の編集長であり、目下フランス農業と農村に進行しつつある諸変化とその中で生じつつある諸問題について、啓蒙的筆陣を張る著名なジャーナリストである。

「・農村社会は、いく世紀もの間、並列的で閉塞的な小社会から構成され、外的世界との関係は、彼らを統轄してきた一般人並びに宗教者の権力をつねに媒介としていた。…農民自身の反応は、いつも、自分の労働、自分の仕事、自分がもつ知識の函数であった。」

書評 マルセル・フォール『フランス社会における農民』

社会学者が「内集団」(en-groupe)と俗称するのは、農民に属するこの世界であった。そして、これ以外のすべて、つまり農民にとって外的なものは「外集団」(hors-groupe)であった。「内集団」に関する事柄は、透明・明瞭・具体的であり、しかもしばしばよく観察されており、その判断は妥当かつ、良識に富んでいる。

しかし、都市、労働者、政治のように具体的な観察と認識の枠外にあるもの、つまり「外集団」に関しては、よく知られていないしまた分析もされていない。」(一九四—四五頁)。

本書は、要するに、フランス農民社会と農民の行動を「外集団」との広い関連、脈絡の中で描き出し、いわゆる農民問題が現代フランス社会にもつ意義を広く一般に喚起しようとした啓蒙書であるといえよう。

本書の構成は、二部、九章よりなる。

第一部歴史篇は、中世から大革命を経て現在に至る歴史過程を対象としているが、内容的には、上述の如き著者の問題視角の当然の反映として、工業化と都市化の影響が拡大する一八八〇年代以降の、農業・農村問題をめぐる農業諸組織、政党等の具体的な動きの特徴と性格が通史的に概説され、

第二部分分析篇は、第一部の諸事実を前提として、農民と国家、政治、市民社会との関係等、農民の置かれている社会的状況の

理解を深める上で重要な諸側面に関して、やや立ちいった分析が試みられている。

著者が以上の中で言及している事象は、きわめて多岐にわたっており、そのひとつひとつについての著者の評価をめぐって当否を云々しうる余裕も能力も筆者にはない。

また、もともと、本書は厳密な社会学的概念に基づく専門的分析の本ではないし、著者の独自の見解がそれとして体系的に展開されているわけでもない。

敢えて、著者の本書全体における主張めいたものを筆者の理解なりに求めるとすれば、次のようにいうのであろうか。

① 工業社会の発展と都市化の影響の拡大並びに農業近代化に伴う諸矛盾は、農業と農村問題をめぐる農業組織、政党を中心とするさまざまな社会的、政治的運動を発生・展開させてきた。しかし、それらの運動は、いずれも、運動の動機・目的・性格において、実践的にも理論的にも一般的現実性を持ち得なかった。

その理由は、これらの運動が、農業者自身の主体的参加に基づくものとはいえなかったことと、より本質的には、農業をいかに近代化し、農民社会をいかに一般市民社会に編入・統合するか、という基本課題に応え得る総合的で、しかも具体的な理論と展望を持っていなかったからである。

② しかし、戦後特に一九五五年以降の工業化の急速な発展拡大と「農業革命」の段階は、この基本課題の解決をますます不可避的に鋭く提起しつつあるといえる。しかもC.N.J.A（全国農業青年サークル）の運動と要求にみられるように、それはいまや農業者自身の課題として認識されている。

彼らは、なお少数ではあるが、すでに伝統的〈内集団〉に属する人間ではない。フランスの農民史上はじめて「未来を想像し」、農業近代化の遂行には国民的努力が必要であることを理解し、一般市民社会において自らの占めるべき地位と役割を理論的・実践的に模索しつつある。

著者は、このような状況を豊富な食料を駆使して巧みに描き出し、本書の末尾を次の文章で閉じている。

「今日すでに自らを規定し、自己の占めるべき地位を探索しつつあるこれら明日の農業者は、いかなる政治的選択を行なうであろうか。」

この選択は、これから農業近代化の渦中に生きる人間に属する……。

しかし、フランス社会としては、果していかなる道を選ぶのであろうか。彼女は、農業がもたらすやっかいな問題を避けて通るのか、それとも自らそれに立ち向うのか。あるいはまた、単に問題の解決を長引かせることで満足するのだろうか……。

農民の社会的地位と活動の将来は、フランス近代社会のもつ
侵透力 (Pénétration) と、近代農業を受容しうる能力のいか
んにかかっている」(三八四頁)。

著者のこの結論は、單なる問題提起としてみてもやや抽象的
すぎるし、特に著者自身の具体的な展望が出されていないので
充分に説得的であるとはいえない。

また、本書全般における著者の所論については、フランス村
落社会、コミュニヌの構造等、むしろ著者が自明とする内集
団の側の諸変化に関する具体的分析の不足が、少なくとも筆
者など異国人には納得し難い点を残しているように思われるの
である。しかし、いずれにしても、今日の流動化したフランス
農民問題が社会体制にかかわる問題構造を有することを提起し
たフランス人自身の発言として、本書はわれわれ自身の関心を
そそる価値がある。

なお、本書には、フランス農民問題を理解する上で重要な基
礎文献が豊富に紹介され、また一部ではあるが文献の抜萃も掲
載されているので、資料的にもきわめて有用である。